

1 主題構成表

主題名「自然への畏敬の念」(中学校・第2学年) 資料名「槍ヶ岳の開山」(播隆上人)

<p>■ 内容項目 D(21) 「感動、畏敬の念」 美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。</p>	<p>■ 内容項目から見た生徒の実態(意識) ・美しい自然を守ることは大切であることは分かっている。また、自然に関わる不思議なことや神秘的なことに興味がある。 ・身のまわりに豊かな自然があるが、その存在について、感謝や感動の気持ちを忘れがちである。 (要因) ・人知や想像の範囲を超えた自然現象や事象、空間を目の当たりにする機会は少なく、そういった自然の不思議さ、恐ろしさ、美しさについて考える経験が少ない。 ・自分たちの住む町には美しい自然が多いと感じても、自然が生活の中に溶け込み、自然から生命を感じ取ったり、心のつながりを見いだしたりする機会が少ない。</p>	<p>■ 資料の分析 ・本資料は、偉大な大自然に感動し、「人間は様々な意味で有限であり、自然を通して人間の在り方や人生を見つめてきた」播隆上人の生き様を記したものである。 ・笠ヶ岳から荒々しい岩ばかりの峰が峰々を抜いてそそり立っている槍ヶ岳の雄姿を見た時の感動を、写真や映像を用いて資料提示をしながら伝えることで、言葉では表せない胸の震えを想像することができる。 ・生涯をかけて開山のために努力できたのは、槍ヶ岳の雄姿を見た時の感動が心の支えになっていたことや、努力の末、槍ヶ岳の頂上に立つ播隆上人の心の中に、人間の力をはるかに超えた大自然の美しさや神秘さ、荘厳さに触れ、独善的になりやすい人間の心を振り返ることができたという喜びがあったことに気付くことができる。</p>
--	---	--

■ ねらい  
限りない自然の美しさや神秘さ、荘厳さに触れることが、人の心を動かし、生き方を見つめ直すことにつながることに気づき、自然を敬おうとする心情を育てる。

<p>■ 展開の構想 ・播隆上人の槍ヶ岳の雄姿を見た時の感動を理解する。 ・独善的になりやすい人間の心を振り返ることができた喜びとともに、自然に対する尊敬の気持ちを感じていることに気付くことができるようにする。 ・自然に対する「畏敬の念」について、自分との関わりで捉え、自然から感じる仲間の様々な感じ方に触れることができるようにする。 ・「畏敬の念」について、自分なりに多面的に捉えられるようになったことを価値付ける。</p>	<p>■ 基本発問(◎中心発問) ○播隆上人は、なぜ、槍ヶ岳に登りたいと思ったのでしょうか。 ◎槍ヶ岳の頂上に立ってまわりの世界を見た時、播隆上人は、どんなことを感じたのでしょうか。  ○「播隆上人が感じたこと」と「これまでの自分自身の自然に対する思い」とを比べた時、共通する感じ方と異なる感じ方はどんなことですか。 ○自分と自然とのつながりを振り返った時、これから、どんな時に、播隆上人が感じたような自然への思いをもつことができるのでしょうか。</p>
---	---

■ 「私たちの道徳」の活用(授業前・授業中・授業後・活用しない)  
(活用の仕方) P114~116を読み、自然の美しさ(P115)や自然の不思議さ(P116)について考えを書く。

2 学習指導過程

	基本発問と予想される生徒の反応	指導・援助
導入	◇資料提示をし、資料に登場する人物や場面について、説明する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主人公について「浄土宗の僧侶であること」「江戸時代の人で(1782年～1840年)、槍ヶ岳を開山した人物であること」を説明する。</li> <li>・笠ヶ岳と槍ヶ岳の位置関係を示す。</li> </ul>
展開前段	<p>◇資料を範読する。</p> <p>○播隆上人は、なぜ、槍ヶ岳に登りたいと思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・笠ヶ岳からの下山後、言葉では言い表すことができないふるえがくっきりと残っていたから。</li> <li>・峰々を抜いてそそり立つ槍ヶ岳の姿が神秘的でひきつけられたから。</li> <li>・槍ヶ岳の頂に立てば、きっと何かが見える、何かがかめると思ったから。</li> <li>・知らない間に自分ほど偉い者はないと思い、日々、小さなことに争い嘆き、富や権力を求めている人間の心を一瞬して打ち砕いてしまう何かがあるはずだから。</li> </ul> <p>◎槍ヶ岳の頂上に立ってまわりの世界を見た時、播隆上人は、どんなことを感じたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・限りなく広がる天空の下に山々がまるで槍ヶ岳に付き従うかのように見え、美しいと思った。</li> <li>・笠ヶ岳で味わった胸のふるえがより大きく広がるのを感じ続けていた。</li> <li>・今まで、見たことがない景観の大きさや美しさに驚いた。</li> <li>・人は小さなことで争っていることに気付くことができた。</li> </ul> <p>○「播隆上人が感じたこと」と「これまでの自分自身の自然に対する思い」とを比べた時、共通する感じ方と異なる感じ方はどんなことですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・山を見て、「きれいだな。」と感ずることはあったが、播隆上人のように、人間の力の小ささや自然の偉大さまで気付くことはなかった。</li> <li>・播隆上人のように胸がふるえるようなことはなかったが、自然を見て、圧倒されて感動したことはある。</li> <li>・播隆上人の感じ方は、自分だけでなく、他の人もなかなかできないことが分かった。でも、自然は自分のことを振り返り、見直すきっかけを与えてくれるような力があることが分かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・播隆上人は、槍ヶ岳やそこから見た景観にどんな思いを抱いたかを考えながら、範読を聞くように伝える。</li> <li>・資料の範読とともに、映像や画像を提示する。</li> </ul> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">ブロックン現象⇒笠ヶ岳からの御来光⇒笠ヶ岳から見える槍ヶ岳⇒原生林⇒100間余りの岩壁⇒槍ヶ岳の頂上からの眺め</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『言葉では言い表すことができないふるえ』『胸のふるえ』とは、どんな思いのことか』『きっと何かが見える、何かがかめる』の『何か』とはどんなことか』等と問い返しなが、理解を深める。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【深めの発問】</p> <p>★「死ぬ直前まで槍ヶ岳の開山に全力を注いだ」播隆上人が感じたのは、自然の大きさや美しさだけだったのだろうか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・播隆上人は、自然に対する尊敬の気持ち（自然は人間の力を超えるような存在であること）も感じていたことに気付かせる。</li> <li>・グループ交流において生徒一人一人の意見を交流し、異同を整理した上で、学級全体での話し合いを通して、多様な生き方に触れることができるようにする。</li> <li>・グループ交流では、播隆上人の感じ方に対する思いを交流し、他者理解を深める。</li> <li>・全体交流では、グループの仲間の考えから学んだことや、自分と仲間の感じ方の共通点、相違点について発表し、自分の考えの深まりをまとめることができるようにする。</li> </ul>
展開後段	<p>○自分と自然とのつながりを振り返った時、これからどんな時に、播隆上人が感じたような自然への思いをもつことができるのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉では言い表すことができないふるえまで感じたことはないが、夕焼けを見た時に、ほっとしたり、明日も頑張ろうと感じたりしたことと似ているのかもしれない。</li> <li>・大雪で、木が倒れ、停電したことがある。雪は普段見ていると真っ白できれいで、遊び道具にもなるけれど、人の力ではどうにもできない大きな力をもっていると感じた。自然の美しさと怖さの両方を感じた時、自然の存在の大きさを感じるのではないかと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「播隆上人が感じたことは、槍ヶ岳に登るような非日常的なことがないと感じられないことだろうか」と問いかけ、日常的に触れることができる身のまわりの自然にも目を向けて、自分の生活を見つめることができるようにする。</li> <li>・事前に「私たちの道徳」P115・P116に記入した内容から生徒の経験や感じ方を把握しておき、自分のよさに気付いたり、考え方が変化したりした生徒を価値付けられるようにする。</li> </ul>
終末	<p>◇本時、高まった生徒の感じ方について、価値付ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然に対する思いを、自分なりに多面的に捉えられるようになったこと、仲間との交流を通して、自然に対する認識や感じ方が深まったことを価値付ける。</li> </ul>	<p>&lt;変容の見届け&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「自然と人との関わり」や「自然と自己との関わり」について、これまでの自分のよさや考え方の変化を感じ、自然を敬う心情を深めている。</li> </ul>

### 3 道徳の時間（道徳科）と他の教育活動との関連

＜場の内容・ねらい＞

＜生徒の意識＞

＜指導・援助＞

<p>行事（6月） 「自然体験学習」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然の雄大さに触れたり、自然の摂理に生命の尊さを感じたりして、自然への畏敬の念をもつことができる。</li> </ul>	<p>【日常の活動】</p> <p>○朝・帰りの会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然現象の機会を捉えて、教師が感じたことを生徒に伝える。</li> </ul> <p>○読書活動</p> <p>宇宙飛行士、冒険家等の著書から、著者の生き様に大きな影響を与えている自然の偉大さについて語り合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然の恵みに感謝しながら、有効に活用して生きてきた先人の知恵ってすごいな。</li> <li>・自然の厳しさもありがたさもよく分かっているな。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然の力や美しさを感じ、自然に対して、新しい認識をもつことができた生徒の感じ方、考え方を価値付ける。</li> </ul>
<p>理科（6月） 「生物と細胞」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生物の組織などの観察を行い、生物のからだは細胞からできていること、そして植物と動物の細胞のつくりの特徴を見だし、理解できるようにする。</li> </ul>	<p>○読書活動</p> <p>宇宙飛行士、冒険家等の著書から、著者の生き様に大きな影響を与えている自然の偉大さについて語り合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地球には、たった1個の細胞ですべての生命活動を行う仕組みを備えている単細胞生物もいれば、多細胞生物のように階層的な仕組みをつくり、より複雑な生命活動を行っている生物もいる。同じ細胞でもこんなにはたらきが違うなんて、生物って不思議だ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然の神秘について、新たに感じられるように、単細胞生物と多細胞生物の共通点や相違点について指導する。</li> <li>・自然の崇高さとともに、その自然の中に身を置く自分自身もその自然の中の一人であることに気付くことができるようにする。</li> </ul>
<p>道徳の時間（道徳科）（6月末～7月初） 「槍ヶ岳の開山」（播隆上人） 内容項目 D（21）「感動、畏敬の念」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・限りない自然の美しさや神秘さ、荘厳さに触れることが、人の心を動かし、生き方を見つめ直すことにつながることに気付き、自然を敬おうとする心情を育てる。</li> </ul>	<p>○朝・帰りの会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「私たちの道徳」「美しいものへの感動と畏敬の念」（P114～119）の中の「この人の言葉」を読み、感じたことを交流し、「生きている意味」「子どもの頃の思い」から彼の自然に対する畏敬の念を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自然に比べると人間の力って小さい。」ということに気付かせてくれる力が自然にはあるということが分かった。「きれいだな。大きくて、すごいな。」とは思っていたけど、今までとは違って、自然って、人に何かを気付かせてくれるような大きな力をもっているから、すごいと感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自然って、すごいな」というだけでなく、人間は有限であることに気付かせる。</li> <li>・人間の力が及ばない、理解を超えていることであると自分なりに感じたり、自然に対する尊敬や人間の小ささを感じるなど謙虚に受け止めたりしている生徒を価値付ける。</li> </ul>
<p>社会（9月） 「日本の諸地域」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・豪雨による土砂崩れと水害に対する取組について、自然環境の特色と関連付けて考察する。</li> <li>・さんご礁を守る取組について、地域開発の動向と関連付けて理解する。</li> <li>・環境問題を、自然環境や人々の生活と関連付けて捉え、特色をまとめる。</li> </ul>	<p>○朝・帰りの会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「私たちの道徳」「美しいものへの感動と畏敬の念」（P114～119）の中の「この人の言葉」を読み、感じたことを交流し、「生きている意味」「子どもの頃の思い」から彼の自然に対する畏敬の念を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然は、地震、火山噴火といった人間の力ではどうすることもできない猛威を振るうこともある。一方で、地球上の動物は人間も含めて、自然の恵みの恩恵を受けて生活している。また、自然は、美しさを見せる。自然は畏れる面、敬う面の両面を併せもっている。人間と自然の調和を考え、共存する方法を考えていこう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然と共存するために、家の造り方や災害対策など人々の生活に影響を与えていることや、観光業と自然環境保全の両立に課題があることなどについて取り上げる。</li> </ul>
<p>美術（10月） 「自然を形に」 〈四季の和菓子づくり〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・工芸品に生かされている自然の美しさや季節の彩りなど造形的な工夫に関心をもつ。</li> </ul>	<p>○朝・帰りの会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「私たちの道徳」「美しいものへの感動と畏敬の念」（P114～119）の中の「この人の言葉」を読み、感じたことを交流し、「生きている意味」「子どもの頃の思い」から彼の自然に対する畏敬の念を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分はこんなにも美しく豊かな自然に囲まれて生きているんだ。それを感じられる心もち続けたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本は四季の変化による豊かな色彩に恵まれている。それを取り入れた造形的な美しさに気付くことができるようにする。</li> </ul>

# 槍ヶ岳の開山 — 播隆上人

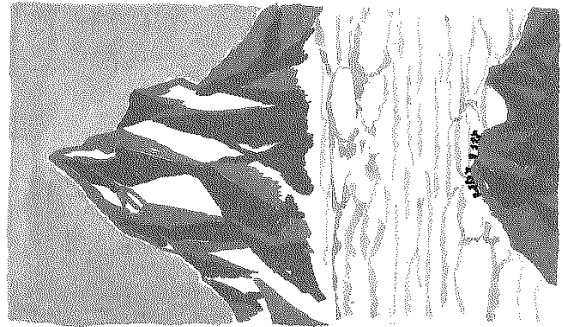
今、播隆と十数人の村人は、笠ヶ岳の頂に立っていた。だれもおし黙り、目だけきらきら光らせて立ちつくしていた。

目の前には、限りなく大きく深い自然の姿があった。下界では気付くこともなかった世界である。西に傾いた陽光の中に、北には立山連峰が、西には白山が、ゆう然と雲の上に浮かんでいた。やがて、深い静けさの中、日は西の雲海にかくれようと、山々は薄すみをひいたように、ひとかたまりになり始めていた。と、そのとき、その静けさを引き裂くように、一人の村人が叫んだ。

「見よ、見よ。雲の中に仏様が。」

皆、いつせいに目を走らせた。そこには、白、赤、紫の大きな光の輪が雲の上に浮かび、その中に、たしかに、金色の仏の姿とも見える影が浮かび上がっていた。

(この現象は、今ではブロッケンのおかしな妖怪と呼ばれ、高い山で太陽を背にして立つ人の影を前方の雲や霧に映す自然の現象であるが、当時の村人はそのことを知るはずもなかった。)



「ああ、ありがたや。」

皆、思わずその場に座り込み、涙を流して伏し拝んだ。

少し下った岩屋で夜を明かした一行は、次の朝、再び御来光を拝みに頂に立った。雲海は刻々と色を変え、やがて姿を見せる朝の太陽。折り重なった山々は、次第にそれぞれの輪かくを見せ始めた。突然、きのうは雲の間に姿をかくしていた、荒々しい岩ばかりの峰が浮かび上がってきた。それはひとときわ高く天に向かっていた。

播隆は息をのんだ。そして、ふるえる胸を押さえながらその山を見つめていた。

「槍ヶ岳だ。」

誰かが叫んだ。播隆は身じろぎもしなかった。

槍ヶ岳を下りた播隆の胸には、言葉では表すことのできないあのふるえが、くつきりと残っていた。そこには、知らない間に自分ほどえらい者はないと思いい、日々、小さなことに争い嘆き、富や権力を求めている人間の心を、一瞬に打ちくだく何かがあった。峰々を抜いてそそり立つ槍ヶ岳の姿は、まさに神秘そのものだった。播隆は、なんとしても、あの槍ヶ岳の頂に立ちたいと思いにかられた。

播隆は、行動を開始した。だが、その試みは、予想したよりはるかに厳しかった。

そこらあたりの山々にくわしい村人、中田又重郎を案内人として少し奥へ入ると、もう道もない原生の林であった。背たけほどある笹やぶを分け、行く手をさえぎる枝を払い、倒れた木々をのり越えて歩む一步一步だった。やつとの思いでそこを抜けると、次には、厳しい岩山とのたたかいが待っていた。雪の残る急斜面を、まるで、はいつくばるように登った。播隆の手足には、いたるところに血がにじみ、その歩みは次第におそくなっていった。しかし、彼の心は、ますます燃えふくらんでいた。この槍ヶ岳の頂に立てば、きっと、何かが見える、何かがつかめると思った。

だが、それを目前にしたところで、二人の歩みは完全に止まった。鋭くどがった頂に至る百間あまりが、切り立った岩壁だったのだ。何ものをも寄せつけない岩壁と飲む水もなく凍えるほどの夜の寒気、そして、疲れきった体。ついに播隆は、きつとまた来ることを心に決め、引き返さざるを得なかった。

それから二年。今、播隆は、霧の間に見えがくれする槍ヶ岳の頂をとらえようとしていた。

案内人の又重郎が先に立ち、二人は腰を荒なわで結び合い、そそり立つ岩壁

に向かっていった。岩の割れ目に指をかけ体を持ち上げる。わずかに突き出たところがあれば足場とする。全く手がかりの無い所は、綱を岩にひっかけ身を引き上げる。そんな作業のくり返しであった。上に登るより、横へ横へと道を求め、むだな動きをすることの多い歩みだった。いくつかの岩石が、その身をかすめてころがり落ちていった。こんな必死の行動を始めてから、どれほどの時間がたったのだろうか。最後に残る大岩をやつとの思いでよじ登ると、そこが、夢にまで見た槍ヶ岳の頂だった。

播隆と又重郎は、その場にくたくと座り込み、しばしばう然としていた。どつとふき出した汗は、足もとから吹き上げる風に飛び散った。ふと、我にかえった二人の目に、まわりの世界が一気に飛び込んできた。限りなく広がる天空の下に、山々がまるで槍ヶ岳に付き従うかのように、その頭を並べていた。頂に座る二人は、その景観の荘厳さに、押しつぶされんばかりであった。

播隆は、思わず立ち上がった。そして、かつて笠ヶ岳で味わった胸のふるえが、より大きく広がるのを感じ続けていた。

後に、彼は死の直前まで、この切り立つ岸壁に鉄鎖<sup>てつそ</sup>をかけ、誰もが登れる道を開くことに全力を傾けるのであった。



出典 岐阜県教育委員会 郷土の資料 「郷土史研究にうちこむ」  
(平成十三年十一月)